



おねうさ 3
海

ONE USA 3

GLAMOUR WORKS

ADULT ONLY

月野シンゴ

セーラーMoonこと月野うさぎの実弟

ある日、たまたま姉から取り上げたプローチから、まばゆい光がほとばしった
いかなる偶然か、プローチの中の銀水晶がシンゴに反応し、姉の目から理性の
光を奪ってしまったのだ

その結果、うさぎはシンゴの命令になんでも従う肉人形へと変わってしまった
悪ふざけで全裸になるよう命令したシンゴは黙って命令に従った姉の白い裸身
に息を呑み魅せられてしまう……思わず姉弟の一线を超えたシンゴとうさぎ
それからは、肉欲を貪る毎日を送るようになる
銀水晶の力はシンゴに膨大な精力とセーラー戦士にかなる命令をも強制でき
る力を与えるが、段々と物足りなさを覚えていく
姉の正体やプローチの力を知ったシンゴは、その性欲の捌け口を姉の友人たち
にも向け始める

半年後——シンゴの前には、腹を膨らませた五人の性奴が並んでいた
そしてシンゴは新たな生贄を求めて動き出す……

天王はるか

美しき外部太陽系戦士のひとり、セーラーウラヌスこと天王はるか
シンゴの次のターゲットは彼女だった

学校帰りにシンゴに呼び止められたはるかは、そこで意識を失い気が付くと
どことも知れない地下室に吊り下げられていた

奇怪な力で肉体の自由を奪われたはるかは、それでもシンゴの陵辱に抗い続け
た……だがそれがシンゴの餌だった

銀水晶の力で、シンゴへの反抗心を抱くたびに性的快感を覚えるように暗示を
かけられていたのだ
逃れようのない快楽の蟻地獄でもがき続けるはるか……

そして今日も性玩具となったはるかの受難が始まる

コンクリートの壁に囲まれた薄暗い小部屋
その中に白い裸身が、まるで冷凍肉の
ように吊り下げられていた……

「……うう……」

「やあ目が覚めた？はるかサン」

「くッ」

目の前に立った全裸の少年の
陽気な挨拶に顔を歪めるはるか

少年——シンゴに監禁されてから
何日が経っただろうか……

飽くことなく繰り返される陵辱に
快楽と羞恥に塗れて絶頂と気絶を
繰り返し、もう完全に時間の感覚
がない……食事の回数で三日以上
と判断している程度だ
そして今日も屈辱の一日が始まる
うとしていた……



「亜美さんに作ってもらったんですけどね」
シンゴは注射器を取り出しながら笑う

「母乳ができるようにするナノマシン？
なんだそつです…シルバーミレニアム
由来の技術だとか言っていましたね
だけど今みんな普通に母乳が出る
状態なんで、はるかさんで実験
することにしました」

シンゴは、はるかの乳首に注射器
を突き立てると素早く薬液を注入
した。はるかの乳房の中にじわり
と熱い感覚が広がっていき、それ
はやがて疼きへと変わり、乳首が
見た目にもはっきりと膨らんで
痙攣し始める

だが乳首から射精のように母乳が
吹き出すとついにその表情はだら
しなく崩れ乱れた





あアッ!!

「仕上げに電気で刺激しておくとおっぱい内部に定着して、いつでも母乳プレイが楽しめる……ということなんで……イキますよ?」

乳首に電極を繋がれたはるかは、電気を流されるたびに身体を痙攣させ母乳をまき散らし叫び啼く

「そうだ!そのまま電気でイキながら変身してみせてよ!」

無邪気に笑ったシンゴは、はるかの股間に変身スティックを突き挿す

「さあ!変身しろ!」

「う、うらぬすぶらねっつばわ……シンゴの命令通りにするしかないはるか

変身時の衝撃で乳首から電極がはじけ飛ぶ
あまりにも敏感になったのはるか性感は
それだけで彼女を絶頂に押し上げた
美しい顔を涙と汗でぐしゃぐしゃに
したはるかは、ぐったりとぶら下が
り荒い息を履き続ける……

「まだ始まったばかりだよ
はるかサン……」

シンゴは、そう言うとはるかを
天井から吊り下げていた金具を
外し始めた





ぴちゃ
ぴちゃ

むぎゅっ
むぎゅっ

「ほらほら、一度イッたくらいでそんな
気の抜けたフェラやってちゃダメだよ？」

はるかにはシンゴの股間に顔をうずめ
その肉棒に舌を這わせていたが、
シンゴの叱責にも動じず機械的に舌
を動かし続ける

「ふうん、まだ抵抗できるんだ
それなら……」

「ひゅっ！」
はるかが呻く
シンゴの「命令」で自ら乳首をじごかさ
れ
たちまちのうちにびくりと身を震わせた



「まったく強情ねえ……」
突如はるかか耳に聞き慣れた声が響く
なんとか目だけ動かし先に見えたのは
セーラーネプチューンこと海王みちる
だった……

「みちるー気をつけろー！そいつは……！」
シンゴの「命令」に支配される前にと警告を
発したはるかだったが……

「まったくダメねえ……」
必死なはるかの声など聞こえないように
みちるは、はるかを脇に押しやりシンゴ
の前に跪いた

「こっやるのよ？はるか」
そう言うともみちるは、その端正な唇で
シンゴの肉棒を咥え込む
はるかには、目前で起こってることが
信じらなかった……





「な、なにをやってるんだ！みちるッ！」

だがはるかか悲痛な叫びなど聞こえないのか
みちるは美しい顔を歪め、下品な音すら立て
シンゴの肉棒を一心不乱にしゃぶり続ける…

じゅっぽ

じゅっぽ

「ぶはっ」
はるかにとって悪夢のような時間は、
シンゴの肉棒から白濁液が噴きだした
ことでようやく終わった……

だがみちるは顔中に白濁液を塗りたくられ
つつも満足気な表情でため息をついた
「……ぶっ……ぶっ……はるか……」
「奉仕というものは、
こころするものなのよ？」



「まったくあなたときたら
頑固で困ったものねえ……」

みちるは普段と変わらない口調で
はるかに話しかけていたが、その
目は一度射精した程度ではまった
く萎えないシンゴの肉棒から離れ
なかった

「ふふふ……さすがシンゴ君
この程度じゃ全然物足りないのね……」





「いい？はるか…愛しあうって
いうのはね、こうやるのよ」

そういうとみちるは、シンゴの
頭を抱き寄せる
シンゴはみちるの乳房にむしゃ
ぶりつき、薄布越しに陥没気味
の乳首を啜えて引きずり出す

「あん！シンゴ君せっかちねえ」
「ふふ…みちるさんこうされる
の好きなくせに」

「さあ…シンゴ君好きなほうでいいわよ」
みちるはシンゴに向かって尻を突き出し
ぶ厚い尻肉をかきわけふたつの穴を晒す



「うんアナルでいこうかな？」
しげしげとみちるの双穴を眺めて
いたシンゴが答える

「あ…ごめんなさい…ちょっと
待ってもらえるかしら…ん…」
みちるは顔をしかめると肛門
から飛び出てきたのは…
変身スティックだった

じゅわん
びゅん
びゅん

んっ





「ふふ…シン君に言われてお尻に挿れたのをすっかり忘れてたわ」
みちるは、いたずらっぽく微笑む
腸汁にまみれた変身スティックが
ずぶりと抜かれ、みちるの尻穴が
ぽっかりと口を開けて中の肉襞を
外気に晒す……

「ああ……そんなこと言ったっけ？
それじゃ言いつけを守った」褒美も
兼ねてお尻かな……」

シンゴはそそり勃った肉棒をみちるの
肛門にあてがい一気に突き挿した

ずがッ
ぐにゅッ

んはアッ!





シンゴの極太の肉棒が、みちるの尻に
深々と突き挿れられていく

シンゴとみちるでは身長差があるため
立ちバックというより、みちるの尻に
シンゴが跨ってるような格好になっ
ているが、すでにみちるはだらじなく舌
を垂れ恍惚とした表情を浮かべている
だけであった……

ズクッ

ああッ

んまァ!

だらあ〜

シンゴの肉棒に尻穴を挿られ、みちるが嬌声をあげる

おほ♡
ほお♡

おほ♡

アア♡
す♡す♡ごいわ♡

ムホッ♡

スホッ♡



「まったく好きだなあ…みちるさんは」
呆れたような返事を返したシンゴだが
腰の動きを一段と激しくするとぶるっ
と身震いする——射精したのだ

ドクドクドクドクドク

ドク

ポコポコ

うわあ

だがその射精はそれで終わらなかつた
シンゴの身震い、みちるの痙攣具合から
夥しい量の精液がみちるに注ぎこまれて
いつているのが、はるかにもわかる
みちるの腹部が段々と膨張していき
もはや妊婦のような有り様である



身体の内部をすべて精液で満たされた
かのように膨れ上がったみちるは遂に
爆発した

口や鼻からさえも精液を吹き出し周囲
に撒き散らす
信じられないことにそんな惨状のなか
みちるは快感で絶頂を味わっている
ようだった……

あかッ
アッ
アッ

がはッ
アッ
アッ





シンゴは肉棒を尻から引き抜くと
みちるから下りた

みちるは姿勢をまったく変えない
まま、精液を吐き出しながら快樂
の余韻に痙攣し続ける

「ああ…やっぱりリスゴイ…これ…」
なかば放心したまま、うっとりとな
つぶやくみちる……

だら
ま

ハア

ハア

ハア

ハア




ようやく胃の中の精液を吐きつくした
みちるにシンゴが声をかける

「じゃあ、次は下のほうも出して」

「……仕方ないわねえ」
みちるは少しりきむとシンゴの肉棒
でゆるくなった肛門から噴水のように
糞まじりの精液をまき散らした…

狭い部屋の中に新たな異臭が満ち
はるかの鼻孔を刺激する



かなりの量を吐き出したとはいえ、まだ腹がぼつてりと膨れたみちるは精液の重さに耐えかねたようにへたりこみゲップすら吐き出す

「みちるッ！一体どうしたっていうんだー？」
生死すらもにしたパートナーの信じられない痴態を目の当たりにして呆然としていたはるか、ようやく正気に戻って叫んだ

「…はッ！？もしかしてもうすでに洗脳されて……」

「いいえ……違うわ……はるか……」

胡乱な目つきではるかを横目にみちるが答える



「確かにシンゴ君の力は圧倒的で抗えないわ
でも私が彼に従ってるのは私の意思よ……」

「なんだって!?!」

「もう決めたことよ…私は全てをシンゴ君に
委ねることにしたの…あとはあなたをどう
やってこちら側に引き込むかだけが心残り
だったから、彼に頼んであなたを調教する
ことにしたの…実は、今までのはずべて私
のプランだったのよ…」

「な……」

絶句するはるか
パートナーの思いもよらぬ裏切りにどう
反応していいかわからない

「ところがあなたときたら思った以上に頑固
で上手くいきそうになかったから、最後の
手段にでることにしたわ……」



「さあ、はるか一緒に…」
「み、みちる…？」

みちるはゆっくりとだが物凄い
力でみちるをねじ伏せる
股間をはるかの股間に押し付け
足を無理やりに開かせる

「私達、これから一緒にシンゴ君
の子種を授かりましょう…」

「何を言ってるんだ、みちる！」

絶叫するはるかだが覆いかぶさっ
たみちるはビクともしない

あアッ!

あん♡

「さあシンゴ君…いえ、ご主人様私達に子種をくださいませ…」
「や、やめろオッ！」

そんなふたりにシンゴがのしかかり、まずはみちるに挿入する…そして射精…萎える事のないシンゴの肉棒は続けはるかに挿入し、またも射精

それが延々と繰り返された…妖魔ですらこれほどの精力を維持することは不可能であろうと思われるほどの絶倫ぶりであった……

ゴッゴッ

ゴッゴッ!

ゴッゴッ

ゴッゴッ





あうう...

あうう...

「どっ？はるか...これはもう
絶対受精したわよ...ふふ...」

「あ...ああ...」

子宮いっぱいに精液を注ぎ込まれ
溢れた粘液を股間に感じながら
はるかは、もう何を信じていいの
かすらわからなくなっていた...

ドロ...

しる...



股間から滴り落ちる精液もそのままに
みちるは立ち上がるとはるかを見下ろす

「全てをシン「君に委ねなさい…はるか
それが私達の幸せなのよ……」

はるかに、その声が悪魔の囁きにしか
聞こえなかった……



あれから半年近くがすぎた—
ふたりは妊娠し、
いまだ地下室暮らしを続けていた



「い、いやだ！
子供なんて産みたくない！」

地下室にはるかかの絶叫がこだまする…
腹を膨らませたはるかか为天井から吊り
下げられ必死に身を振り抵抗している

「往生際が悪いわよ、はるか
あまり暴れると破水してしまうわ」

「さあふたりで一緒に子育てしましょう…」

NEXT SLAVE : Pluto